

イ. 人間は死ねばどうなるか。死ねば死体と死体でないものに
分かれる。これが死後の人間である。

死後の人間は、生者の目には見えない体を持っている。

ロ. それを「細身」という。目には絶対見えない細かい体（つまり極微の粒子からできた体？）ということだ。だからそれは、どんな硬い物体のなかでも、すいすい通り抜けてしまう。

ハ. 体だけではない。死後の人間は目・耳・鼻・舌・そして完全な肉体感覚を持っている。しかし、体が「細身」で見えないのだから、目・耳・鼻……も形としてあるのではなく、ただ機能としてあるのだ。

二. そのため死後の人間は、見たり聞いたり嗅いだりでき、食事さえできる。ただし、食べるものは「おい」だけである。そして、これには区別がある。生前、善い行ないを積み重ねた死者は、よい香りを食べ、悪い行ないをした死者は悪臭しか食べられない。

ホ. 空間に浮かんだり飛んだりできる能力もある。飛ぶ場合、

どんな離れたところにも一瞬に移動できる。

ヘ. そのように、飛んだりただよったりして空間にいる。だが、それで終わりではない。死後の人間のほとんどは、見えない体のなか深くに、もう一度生まれようとする可能性をはらんでいる。これを転生（生まれ変わる）という。

ト. ただし、自分で好き勝手なとき、好き勝手なところに生まれることはできない。その死者が生前、どんな行ないをしたかによって、次に生まれでるところが決まる。どんな死者も、いい意味でも悪い意味でも、自分の生前の行ないにふさわしいところにしか生まれることはできない。

チ. この「ところ」とは、生命が生まれ出る場所、その他いっさいの条件を指す。とくに男女の結合を指す。どこかの男女が結合し、女性が受胎しようとするとき、それがあつた死者にとつてふさわしい結合なら、その死者は一瞬にそこまで飛び、その受胎のなかに入る。そして新しい生命体——その死者の生前の行ないにふさわしい生命体になる。

リ. だから当然、生前に悪い行ないを積み重ねた死者は、それに見合うだけの生命体にしかなれない。これは死ぬまでに決まってしまうことで、死んでからでは絶対変えられない。死

後にこの法則を知り、しまったと思って、なんとかいいところに生まれ出ようとジタバタもがいてもダメである。

又、そして、このふたたび生まれるまでの時間は決まっていな
い。ある死者はひじょうに短い時間のち生まれる。別の死
者はひじょうに長い時間、空中をただよい、ほとんど永久に
生まれることがない。だが、この時間も、その死者が生前に
何をやったかによって、長くなったり短くなったりするのだ
……。

俱舎論／カルマの法則 祥伝社 五島勉